

リバフロの成人式



応用生態工学会 会長 山岸 哲

財団法人「リバーフロント整備センター」が設立20周年を迎えた。20年といえば、人間になぞらえれば「成人式」であり大変おめでたいことだ。心から「おめでとうございませう」とお祝いを申し上げたい。その一方で、成人式を迎えたということは、これまでは親掛かりで半人前であったものが、これで大人になり自分の責任で生きていかなければならないことも意味している。ならば、親は誰なのだろうか？ などといらぬことも、つい考えてしまう。

ところで、私が当財団とお付き合いを始めたのは、河川生態学術研究会を立ち上げる頃だったと記憶するから、もう10年以上も前になる。「十年一昔」というから、かなりの長さだ。財団の歴史の半分以上の期間お付き合いしてきたわけだが、この財団は不思議な財団だと常々感じてきた。国土交通省のほかの財団ともお付き合いが増え、よその様子がわかってくればくるほど、「リバフロって変わっているな」と思ったものである。どこが変わっているかというところ、ほかの財団には「当財団は、これこれの目的に邁進しているんだぞ！ ドーダ、マイッタカ？」というところがあるのに対して、リバフロには一向にそれが感じられないことだ。何となく頼りなく、なよなよして、ふわふわして、とらえどころがない。ほめてしまうと謙虚なのである（その振りをしている節もあるが）。

ここで、「ドーダ」の説明をしておかないと、これから書くことが読者によくわからないだろうから書きくわえておきたい。ドーダというのは、「自己愛に源を発するすべての表現行為である」と定義され（鹿島茂、『ドーダの近代史』朝日新聞、2007）、もともとは、漫画家の東海林さだお氏が『もっとコロケな日本語を』（文藝春秋、2003）の中でそれを提唱したものである。ドーダ学というのは、人間の会話や仕草、あるいは衣服や持ち物など、ようするに人間が行うコミュニケーションのほとんどは、「ドーダ、おれ（わたし）はすごいだろう。ドーダ、マイッタカ？」という自慢や自己愛の表現であるという観点に立ち、ここから社会のあらゆる事象を分析しているという学問である。私が最近かなりはまっている学問分野で「これさえあれば、人間のすべての活動を解明できる」とさえいわれている最新の理論である（鹿島、2007）。こう書くといかにも難解そうに聞こえるので一例だけあげておく。たとえば、流行作家が銀座の高級クラブへ行って、出迎えたママに

「寝てないんだ」と無然としてつぶやくのは、「忙し自慢ドーダ」であり、そのママがこれ見よがしに大粒のダイヤの指輪を見せびらかすのは、私は美人だからこんな高価なダイヤを買い与える男性がいるのよ、という「美人自慢ドーダ」だ。ということだけをとってあえて説明しておいて先に進みたい。

そこで、私は、リバフロとはいったい、どのようなドーダをかませるべきなのかを知ろうと、「寄付行為」をわざわざ取り寄せてみた。そうしたら、その第三条に「この法人は、水辺及び河畔（以下「水辺空間」という。）に関して、そのあり方、保全、利用と整備、生態の保全と回復等の調査研究及び技術開発を総合的に実施し、かつ、その成果を幅広く社会に活用して、安全で、豊かな潤いのある国土の整備に資することを目的とする」と崇高な目的が書かれていたのである。

ここに至って、私はリバフロのドーダの弱さが、はたとわかった気がした。つまり、この目的は大変なものであり、そんじょそこらの学者が東になってかかっても、とても解決できるようなドーダではないのである。これを果たすには、まさに私も関係させていただいた委員会で、真剣に取り組んでも果たすことができなかった「河川環境目標とは何か」を明快にし、それを河川や海岸の整備に生かす手立てを確立しなければならないのだ。とても真正面から「ドーダ、マイッタカ？」といえる代物ではないだろう。

骨太のドーダがリバフロにはないと、さてここまで私は書いてきたわけだが、そもそも「ドーダ」には「陽ドーダ」と「陰ドーダ」があるとドーダ学は教えている（このほかにも「内ドーダ」と「外ドーダ」、「表ドーダ」と「裏ドーダ」などあってドーダは奥が深いが、今回はそれらには触れないことにする）。リバフロの歴代の理事長は「ほかの財団のような見え透いた、誰にでもわかるような仕事（陽ドーダ）は、わしのところではしないのだよ。今は結果が出ないかもしれないが、もっと深いものがあって、何が出てくるかわからないのが、リバフロなんだよ。ドーダ、マイッタカ？」という「陰ドーダ」を結構かましてきたような気がしてならない。また、それがリバフロの一番の良さなのだろうと私はひそかに思っている。成人式も終わったのだから、さらにがんばって、これからは陰ドーダをどんどんかましてほしいものだ。